

【表現学関連分野の研究動向】

日本文学研究(近代)

瀬崎 圭二

2021年に刊行された日本近現代文学の研究書を紹介しながら、その研究動向を以下に整理したい。

近年、作家の事典類が頻繁に刊行されているような印象があるが、その傾向は2021年も続いているようだ。まず3月に落合教幸、阪本博志、藤井淑禎、渡辺憲司の編集による『江戸川乱歩大事典』が勉誠出版から刊行された。この事典の特徴は、乱歩個人のみを対象とするのではなく、作家や物語を取り巻く社会状況や、関連するミステリー、メディアの状況も項目に取り上げている点にある。このような形式は、作家の事典のそれとして定着した感もある。4月には遠藤周作学会の編集による『遠藤周作事典』が鼎書房から出版された。遠藤周作は、その知名度や読者数の割には、研究が作家の枠を越えて展開していないように思われるが、この事典はその問題を解決する土台となるであろう。事典ではないが、11月には井上隆史、久保田裕子、田尻芳樹、福田大輔、山中剛史の編集による『三島由紀夫小百科』が水声社から刊行された。この中には「主要作品事典」が設けられており、その他の諸論考と共に、かなり専門的な情報を読者に提供している。事典類は、専門的な研究成果が一般読者に伝達される回路ともなり得るため、今後も充実した内容の事典が刊行されることを望む。

個別の研究成果としては、5月に論創社から刊行された小正路淑泰『堺利彦と葉山嘉樹 無産政党の社会運動と文化運動』が目にとまった。著者は日本近現代文学の研究者ではなく、政治史、社会運動史の専門家だが、この書の第Ⅱ部に掲載されている葉山嘉樹についての研究成果は貴重だ。作家葉山嘉樹についての事実はまだ知られていないことも多いため、この書に掲載されている葉山の未発表資料はその空隙を埋めるものとなるであろう。葉山の小説どころかプロレタリア文学自体があまり読まれていない現状において、同月に『葉山嘉樹短篇集』や、10月に『黒島伝治作品集』が岩波文庫から刊行されていることも興味深い。

9月に岩波書店から刊行された十重田裕一『横光利一と近代メディア 震災から占領まで』と、12月に東京大学出版会から刊行された安藤宏『太宰治論』は、長年の研究の集大成である。両者は横光利一研究、太宰治研究の中心人物であるだけでなく、日本近現代文学研究の方法論を切り開いてきた方たちでもある。この二冊の書物の刊行に深く敬意を表したい。これらに、11月にひつじ書房から刊行された松本和也の『文学と戦争 言説分析から考える昭和一〇年代の文学場』を加えれば、昭和文学研究の現状がより多角的に捉えられよう。

なお、2022年度から実施される高等学校の新学習指導要領によって国語の教科に「文学国語」が新設されることになるが、このことをめぐって、2021年は日本近現代文学の研究者からも多くの提言が見られた一年となった。この問題は継続して注視すべきであろう。

(同志社大学)